氏　　名　毛利俊雄（もうりとしお）

学位の種類　理学博士
学位記番号　論理博第927号
学位授与の日付　昭和61年3月24日
学位授与の要件　学位規則第5条第2項該当

学位論文題目　頭蓋非計測形質からみた日本列島人の地理的，時代的変異

論文調査委員　（主査）教授 池田次郎　教授 岩本光雄　教授 江原昭善

論文内容の要旨

日本列島に居住する人類集団の頭蓋形態の地理的および時代的変異に関しては，これまで主として頭蓋計測値について詳細に分析され，その成果に基いて日本人の成立をめぐる様々な学説が提出されている。しかし，頭蓋非計測形質を用いたこの種の研究は，少数の集団を対象とした山口，百々らの論文をみるにすぎない。申請論文は，頭蓋非計測形質の出現頻度の集団比較から，この問題を全国的規模で検討したものである。

申請者は，近畿，北陸，南西諸島，樺太，朝鮮半島，中国の現代人，西日本古墳時代人，縄文時代人の頭蓋骨1126について，30項目の非計測形質の出現頻度を集団ごとに求め，次いで，東北，関東，北海道，朝鮮半島，中国，モーコの現代人6集団のデータを文献から引用し，計14集団の関係を単変量および多変量的に解析した。

申請者は，最初に日本列島および近隣地域の現代人集団の地理的変異を取り上げ，本州の各集団は比較的よくまとまるが，東日本と西日本の間に地域差が存在すること，南西諸島は沖縄・奄美と先島の2集団に分れ，沖縄・奄美集団は本州現代人に近いが，先島集団は本州ともまた沖縄・奄美とも遠く離れる特異な集団であること，北海道と樺太はともにアイヌ独自の特徴を示しながら，樺太は縄文時代人に類似する北海道よりも，本州や大陸の現代人集団に近いことなどを明らかにし，樺太集団が過去に大陸集団から遺伝的影響を受けた可能性が高いと推論している。また，大陸の朝鮮半島，中国，モーコの3集団は互に近いが，中では朝鮮半島集団が本州日本人に最も類似することを示している。

次に，申請者は時代的変異を検討し，縄文時代人と現代日本人は遠く離れ，古墳時代人はその中間に入るが，近隣諸集団を比較に加えると，西日本古墳時代人は現代日本人以上に朝鮮半島集団に近く，また渡来系弥生人とみられている北部九州の金隈集団とも類似することを示し，西日本では古墳時代までに朝鮮半島からの渡来人の体質が優勢になっていた可能性を示唆している。さらに縄文時代の地方差に触れ，同一遺跡の男女差はきわめて小さく，渥美半島の3遺跡の縄文人集団は相互に近く，吉備地方の2集団はこれとは遠いが，とくに津雲集団は地域的に近い太田集団からも離れ，縄文人集団としては特異な存在であ

ることを見出している。

以上，申請者が明らかにした日本列島における頭蓋非計測形質の地理的，時代的変異は，頭蓋計測値による従来の結果と多くの点で一致する。また，両者が一致しない場合も，それは従来の知見を再検討するのに有効であり，頭蓋の非計測形質が計測データとともに日本人の成立の問題を解明する重要な手掛りになりうることが示されている。

論文審査の結果の要旨

人骨の研究は計測値を扱うオステオメトリーと，非計測形質を対象とする研究に大別されるが，古くから研究の主流を占めてきたのはオステオメトリーである。1970年代以降，人骨とくに頭蓋骨の非計測形質による集団間変異の研究が急増したが，それはこの分野に多変量解析法が導入されるようになったためである。日本でも明治以来，頭蓋計測値を用いた研究は枚挙にいとまないが，非計測形質について集団比較を行った研究は2，3にとどまっている。申請論文は日本列島および大陸の現代人，西日本古墳時代人，縄文時代人など多数の集団相互の関係を頭蓋非計測形質について検討し，この地域の地理的，時代的変異の実態を明らかにするとともに，その要因を考察した最初の論文として注目される。

申請者は，最初に参考論文1で明らかにした頭蓋非計測形質の性差，年齢差，形質間の相関，左右相関などについて再検討した結果，性差と左右相関を考慮して各集団の形質出現頻度を側単位で算出するとともに，各集団の男女をそれぞれ独立の集団として扱っているが，この手続きは慎重かつ適切である。

申請者が明らかにした現代人の地域変異のうち最も注目に値するのは，樺太集団がアイヌ固有の特徴を保持しながら，北海道集団にくらべ，より本州日本人に近いという指摘である。申請者は，個々の形質の出現頻度について，これら3集団を大陸の現代人集団と比較するとともに，頭蓋計測値による従来の研究結果を引用し，樺太集団と本州集団との類似が，ともに過去に受けた大陸からの遺伝的効果を反映するものと推論しているが，この解釈は妥当であり，説得力に富んでいる。また，縄文後晩期人の地域差に関しても興味深い新知見がえられている。

時代的変異に関して，申請者は縄文時代人と現代本州人との間に西日本古墳人が位置することを示しているが，これは従来の頭蓋計測値による成果を裏づけたものである。しかし，朝鮮半島集団との比較で，申請者は西日本古墳人が渡来系集団と認められる北九州の金隈弥生人とともに現代本州人以上にそれに近いという結果をえているが，西日本古墳人と朝鮮半島集団とのこのような強い類似は，頭蓋計測値の比較では発見できなかったものであり，申請論文の最も重要な成果である。申請者は大陸集団との混血の効果が，頭蓋の非計測形質では急速に発現したのに対し，計測値では緩慢であったために，西日本古墳人頭蓋がモザイク的形態を示すに至ったのではないかと推論しているが，これは今後の問題提起として重要である。

以上，申請者が明らかにした成果は，この分野の研究の発展に新しい観点から大きく寄与したものと評価することができる。

よって，本論文は理学博士の学位論文として価値あるものと認める。

なお，主論文及び参考論文に報告されている研究業績を中心とし，これに関連した研究分野について試問した結果，合格と認めた。